今　月　の　一　冊

元木更津市教育委員会教育長　西村　堯　選

日本史サイエンス

播田　安弘　著　・　講談社ブルーバックス
ISBN978-4-06-520957-8
1,000 円 ＋ 税

講談社ブルーバックスは、科学に関する入門書、啓発書だと思ってきた。本欄でも、何冊か取り上げて紹介してきた。しかし、本書は、歴史・日本史に関する本である。いや、史実について、科学的な視点でメスを入れた著述である。やはり、ブルーバックスらしい。

著者は、略歴によれば、父は造船所経営、母の実家は江戸時代から続く船大工「播磨屋」の棟梁、ということで、三井造船に入社した船舶の専門家である。

とりあげられたテーマは、三つある。

⑴　文永の役(1274 年)で蒙古軍はなぜ一夜で撤退したのか。
⑵　羽柴秀吉の「中国大返し」はなぜ成功したのか。
⑶　戦艦大和は本当に「無用の長物」だったのか。

いずれも、日本史上謎につつまれたテーマである。

この三つの謎について、著者は、科学者の冷徹な目で、数字に基づいて、通説を疑い、謎に迫っていく。誠にスリリングな著述である。中でも、文永の役の蒙古襲来の章は、船舶の専門家としての面目躍如であり、緻密な検証を進め、圧巻である。

他の二章もそれぞれ興味深いが、この「蒙古襲来」部分について、紹介しよう。

> *この章で述べるのは、船の設計者としての知識・経験をもとに、当時の蒙古軍の軍船の性能、両軍の実力から地理的条件や気象条件までを検証した結果、筆者が最も合理的であると考える文永の役の姿です。*
>
> *(p.18)*

という。

蒙古撤退の要因として、「神風が吹いた」とし、「日本は神に守られているという『神国思想』」につながっていく歴史思想に、科学のメスが入れられる。

ポイント 1

高麗が元から命じられた大型軍船 300 隻、小型上陸艇 300 隻、水くみ艇 300 隻、計 900 隻の 6 か月以内の建造は可能だったか。

> *結論からいえば、当時の高麗の国力を考えたとき、この命令はいわば天文学的な数字であり、実現はとうてい不可能だったと思われます。*

と述べ、1 隻あたりの木材使用量(234 立方メートル)を満たすのには、東京ドーム 150 個分の広さの森林が必要となり、大型船だけに限って検討してみても、300 隻を新たに建造するのには、材料を調達するだけでも、ほとんど不可能であると述べる。

さらに船大工、人夫などマンパワーの面からも大型軍船の新造はせいぜい 150 隻ぐらいではないかと述べる。(筆者は要約して述べているが、著者はもっと精緻を極めた数字を挙げている。以下同じ)

従って、戦闘にあたる兵士の数は、およそ 2 万 6,000 名と考えられる。

ポイント 2

蒙古軍は船酔いで体力が低下していた。

> *対馬海峡を流れる対馬海流の速い流れと、玄界灘の荒海を越えての大軍の移動には、大変な困難をともないました。*
>
> *(p.44)*

と述べ、「上下加速度と周期別の嘔吐率」表などを示し、船の専門家ならではの貴重な知見を示す。

ポイント３

蒙古軍はどこから上陸したのか。

多くの文献は、蒙古軍船は、息の浜沖(現在の東公園沖)に停泊し、そこから上陸したとあるが、

> *著者が検証したところ、それではその後の戦いと、地理的にも時間的にもどうしても整合しないのです。*
>
> *(p.51)*

と言う。

> *息の浜や筥崎に続く博多湾の東側は、一様に水深が浅いことがわかります。大型船が入湾し、投錨するにはかなり不安があるレベルの浅さです。しかも、西側から入ってくると、百道浜(ももちはま)の海側に突き出した地形の先端から東にかけては、浅瀬や岩礁が多くなり、異国から来た船が初めて航行するには大きな危険をともないます。*

と指摘し、

> *蒙古艦隊は博多湾の西側、水深の深い今津を経て侵入し、百道浜沖に投錨したと考えられます。*

と通説を船舶専門家としての目で検証している。

ポイント４

蒙古軍は全軍上陸していなかった。

蒙古軍は、百道浜の、現在のドーム球場に近いところに、水深の関係で陸からは約 1km 離れて投錨したと考えられます。

として、ここから上陸艇で上陸することになる、。ここで、また著者得意の数式が駆使される。途中の計算は略すが、すべての兵士が上陸するには、約 10 時間かかるという。

また、兵站の面でも失敗していたという。蒙古軍兵士は、水と食料の十分な供給を受けられず、敵前上陸にあたっても満足に戦えなかったのではないか、と指摘する。上陸に時間がかかり、兵力の逐次投入の形になり、数的優位を生かせず、日本の武士団が補給のためいったん兵を引いた午後 3 時頃、全員が船に引き揚げを開始した、という。

蒙古軍が恐れたのは、日本軍に援軍が来ることと、もうひとつは、北西風が吹きはじめることだった、と著者は指摘する。北西の季節風である。蒙古軍は、寒冷前線にともなう南風にのって、壱岐に到達し、湯本湾の鯨伏(いさふし・現在の壱岐市勝本町)あたりに停泊して、休息や船の修理、水の補給などをしたと思われる。その夜、南風を吹かせた低気圧の発達によって、急に北西風が吹きはじめ、船が錨を下ろした状態のまま流される走錨が始まり、遭難したものと思われる、と言う。

以上、ごく大雑把に、蒙古襲来の顛末を述べてきたが、随所に光るのは、船舶の専門家の目である。細かな数字、数式を省略して述べて誠に申し訳ないが、他の二章も含めて、ぜひお買い求めの上、史実を見つめる冷徹な目と、論述の鮮やかさを味わっていただきたい。

今月の一冊　(令和 3 年 5 月号　第 167 号)